莞爾々々的あの家此家

永代みち代

『須藤君が細君を貰つたさうだ、見ましたか？』
宅へ被入やる皆様が皆なこんな風な事を仰有います。
『さうですとてね、一寸と好い方よ』
私が斯う云ひますと、屹度又
『あなた見たんですね、どんな方？』
つてお訊きなさいます。
『どんな方つて、好い方らしいわ』
私はたゞ笑つてゐます。
『家は何處です？行つて來やう』
被行つた方は大抵ぶん〳〵怒つてちつしやる。
『どうも大變な女だよ君。あんな奴つてありやしない一體吾々友人を何と心得てるんだか、初めに一寸と挨拶に出た時には、色の白い下ぶくれの、馬鹿に上品臭い女だと思つたさ、それが引込んだきり、些少とも出て來ないんだ。すると須藤の奴、そろ〳〵氣を揉み初めて、頻りにオイ、オイを連發して見たり、手を叩いて見たりするんだが、一向に返事が無い。オイ、お茶を持つておいで、お茶だ、お茶だ、幾ら呼んでも出て來ないものだから、とう〳〵堪へ兼ねて次ぎの間へ立つて催促すると、嫌に甘つたれた聲で以て
『私あんな方嫌ひだわ、お茶なんか出さないことよ』
とこんな事を云やがるんだ、馬鹿々々しい、俺ア突然飛び出して逃げて來た。可哀相に、須藤の奴、餘程馬鹿だよ』
『まあさう、思ひ切つた奥様ね』
私はそれ以上何にも云ひませんけれど、此奥さんがそれしきの事をするのは、不思議でも何でもありません。初め須藤さんが結婚しない前――と云つてその頃は最う同棲して居て、その後も改めて結婚式を擧げた譯でもありませんから、何と云つて好いのか解りませんが――私達の宅へ來て、こんな話をして行きました。
『僕も今度愈々結婚しやうかと思ふ。女と云ふのが面白いんだ、極々自然でねえ、と云つて田舍者でも何でもない、此方の××女學校の出身なんだが、氣に入つたとなると大騒ぎする癖に、反對に氣に入らないと來た日には唾も引つかけない流儀なんだよ、此頃でもね僕が何か書いてると、その傍へ毛布を敷いて寢ころんだまゝ、じつと仰向に一日でも天井を見てるんだ、そしてふいと庭へ降りたと思ふと、今度は雲雀のやうに大はしやぎで歌を唄ふ。三日でも四日でも、家中ありつたけの皿を出して食べてろがしにして、臺所一杯足の踏入場もなくしてるかと思ふと夜の十二時過ぎから眼を覺して、鼻歌で洗濯物をし初めると云つた有樣なんだ、恐ろしく物に好き嫌ひがあつて、それは實に痛快に我儘なんだよ、僕は全く氣に入た』
『併し君、考へるものだよ、戀してるうちは好いだらうが、そんな女が家庭でも持つて見玉へ、痛快どころか。實に堪らないから、よし玉へ、屹度君は今に後悔する』

（永代靜雄君と令閨美知代君のお睦しぶり）

私共が斯う忠告しかけましても、須藤さんは熱し切つて居て、容易に冷めさうにも御座いません。
『いや、僕は、その非家庭的な處が氣に入つたんだ、一生あのまゝに、產れながらの性癖を、ずつと其儘育てゝやり度いつもりなんだから、僕は決して後悔なんぞしないだらう』
『併しね君、家庭は藝術ぢやないんだから――』
私共もおせつかいな性分ですから、人樣の事ですのに、强て自分の意志通りにさせやうとするのです。
『まあなた、須藤さんの奥樣なんですもの、須藤さんさへよければ萬歲ぢやありませんかね、そんな事は、もうおよしなさいつてば！』
私が傍から袖を引きますと、私共は不精々々にまだこんな事を云つてます。

『須藤君、惡い事は云はないから、もう一度考へ直して　で些少とも歸つたのを存じませんので御座いますよ』て見玉へ、我儘な細君位困りものは天下に無いよ、現に僕なんかゞ好い手本ぢやないか家の此奴なんかがその、矢張り我儘者でね』

『まあさうで御座いましたか、お女中さんが、御門をあけますの？』

ですが私共が斯うして、にこにこ暮らしてゐますのゝ同じ理窟か、須藤さんは此頃乳の足らない赤ん坊を抱いて、奥さんの代理にお醫者様へお藥取りに出掛けたりなんか、ハピーな樣子に見へました。

『昨夜宅ではあなたへあがつて、隨分遲くまでお邪魔を致しましたでせう』

『ナニね、大變お話が面白う御座いまして、お歸りになつたのが十二時前でしたと思ひます』

『さうでせうねえ、私はもうよく眠つてゐて、今朝まで　ますわ』

『何故で御座いますの？』

（松竹の女優一行が、長崎一力樓で大御機嫌の光景。座中にはカチューシャの松井君と同じく名を附く須磨子と云ふ藝者も居る。例の長田秋濤君も落ち合つて盛んに秋濤式ニコニコを揮發し揮發したりやとたち）

『いゝえね、出ると先う遲くなるもんですから、内玄關を二寸程あけかけて置いて、皆なお先きへふせらせますの、歸つて來ますとね、自分で締りをして、其儘寢就いて了ひますから、ねむいのに起きてる必要も御座いませんわ』

『まあさうで御座いますか、お宅の旦那樣は本當にお音無しくつてらつしやいますから、世話無しで本當にお羨ましう御座いますことね』

『いゝえどうして〳〵、此頃は私壽命が縮まりさうで御座い

毎日々々宅に居ますから、面倒臭くつて、何でも早く、何處か出張が御座いませんでは、私の肩が拔けませんの』

『ホヽホヽ、御戯談ばつかり仰有います』

『いゝえ全くなのですよ、家に居ますとね、私のアラばつかり拾つて、あれが惡い、これが氣に入らない、本當に如何もうるさくつて、腹が立つて、しまひに私が癇癪を立てますので御座いますよ』

『さうですかねえ、お宅の旦那樣がそんなにおむつかり遊ばすなんて、全く解らないもので御座いますこと』

『どうして〳〵、あの位むつかし家つてめつたに御座いませんわ』

『でもお宅の旦那樣は、私共へ被入つて、何時も奥樣の事をおほめになりますよ』

『ホヽ、何と云ひまして？』

『第一ね、幾ら夜が更けやうが如何しやうが、些少とも八釜しい事も仰有らず、お怒りなさりもしないから家庭は實に平和なものだつてね』

『えゝえ、それはもう、家に居て小むつかしい事を並べられるより、留守の方がどんなに好いか解りませんわ、お互に留守の方が餘程氣樂でよろしう御座いますわねえ』

『さうですか知ら——？』

『ホヽ、如何なすつたの？馬鹿にお沈みなすつて？』

『でもね奥樣、あなた旦那樣のお歸りが遲くつてそれが些少もお氣になりませんこと？心配になりませんこと？』

『心配つて如何？まさかあんなに大きくなつた男が、電車にひかれるやうな事もありませんもの』

『ホヽ、御戯談ばつかり、ですけれども、全く何ともお思ひになりませんの』

（大松關有明さんとおちよ子さん）

『えゝ私寢てゐて何にも考へませんのよ、それに遲い時だの、歸つて來なかつたりした時はね、屹度私にお土產がありますの、此間もね、ダイヤの指環を持つて來ましたの』

『本當にお宅は平和でお羨ましいことね』

『何だつて、もう二時前だなんてそんな事があるもんですか、家の時計が間違つてるんだよ、僕は何しろ山の手の終電車で來たんだから、まだやつと一時そこそこです』

『一時そこ〳〵だつて威張つてらつしやるのねあなたは、一時に歸つて早がつてれば好いわ、たんとそんな眞似をしてらつしやい』

『何です其口の利き方は？　些少と〇〇さんの奧さんに見ならひなさい、幾ら〇〇君が遲く歸つても、何とも云はないつて云ふぢやないか』

『ですから私も寢てませうか、此間私が病氣で寢てて、一寸と出迎へが後れたら、あなたは、何て仰有つて？』

『馬鹿！　誰が人の歸つたのも知らないで寢てろつて云ひました』

『だつてあなたのやうな勝手な方つて御座いませんわ〇〇さんの奧さんを見ならひつ　仰有るから、私があの眞似をするとお怒りなさるし、私の流儀で斯うしてれば斯うしてるでお氣に召さないし』

『誰がお氣に召さないつて云つた？　一寸と友人とお茶を飲んでゝ、二三時間遲れて歸ると、直ぐ八釜しくブツクサ云ふから怒るんぢやないか』

『二三時間なもんですか、假りに今一時としても、あなたの社は何時おひけですか？』

『面倒臭いな實に、お前は僕が〇〇君のやうに、お土產を持つて來ないもんだから、それで怒つてゐんだらう』

『知りませんよ、そんな人を馬鹿になさいますな、これでも私は、ダイヤや時計にあなたを見かへやうとは思ひませんです、ハイ』

『フ、本當に怒つたのかいッ』

『存じませんよ』

『フ、笑つたり、ねぇ前、終電車ぎり〳〵まで家に歸らなかつたのは、如何にも僕が惡かつた、あやまるよ』

『あたり前ですわ、ホゝゝ』

（をはり）